漆工芸職人の“見立て”における特徴認識についての検討

○遠藤 淳司（京都工芸繊維大学大学院）、成田 智恵子（京都工芸繊維大学大学院）、
菅浪 善造（下出蒔絵司所）、近藤 香菜（下出蒔絵司所）、
矢代 大樹（下出蒔絵司所）、伊東 麻純（京都伝統工芸大学校）、
黒田 孝二（大日本印刷株式会社）、高井 由佳（大阪産業大学）、
後藤 彰彦（大阪産業大学）、下出 祐太郎（京都美術工芸大学）、
濱田 泰以（京都工芸繊維大学伝統みらい教育研究センター）

Analysis on characteristics recognition in the “Mitate” of Urushi Craftspeople

Atsushi ENDO (Kyoto Institute of Technology), Chieko NARITA (Kyoto Institute of Technology),
Zenzo SUGANAMI (Shimode Maki-e Studio), Kana KONDO (Shimode Maki-e Studio),
Daiki YASHIRO (Shimode Maki-e Studio), Masumi ITO (Traditional Arts Super College of Kyoto),
Koji KURODA (Dai Nippon Printing Co., Ltd.), Yuka TAKAI (Osaka Sangyo University),
Akihiko GOTO (Osaka Sangyo University), Yutaro SHIMODE (Kyoto College of Arts and Crafts),
Hiroyuki HAMADA (Future-Applied Conventional Technology Center, Kyoto Institute of Technology)

1. 緒言

日本を代表する伝統工芸のひとつに、漆工芸がある。漆工芸や漆器はかつて海外、特に英語圏において“japan”と呼ばれていたことから、この認識は間違いではないと考える。漆工芸作品・漆器は、主に木を用いて成形をした後、下地を施し、その上に中塗り・上塗りを施し、最後に必要に応じて蒔絵や螺鈿といった加飾を施すことで出来上がる。これら漆工芸作品・漆器は使ううちに漆や蒔絵が剥げてしまうことがあるが、熟練の漆工芸職人たちはその制作技術や制作工程、使われている素材を見抜くことにより、適切な修理・修復を行ってきた。その際、彼らは“見立て”と呼ばれる観察行為により、作品に内包された情報を収集している。見立てでは対象作品を直接目で見て、手に取ることにより特徴を認識し、必要に応じて言葉での表現を行う。そこで熟練の漆工芸職人が、どのように対象作品の特徴を捉えているのかを検討するために、本研究では特に見立て中に発せられた言葉に注目し、テキストマイニングによる分析を試みた。これは漆文化財の修理・修復の際に、熟練の漆職人の知見を活かした修理・修復法や非破壊での分析法へとつなげることも視野に入れている。

2. 方法

2. 1 被験者

被験者は、専門学校にて漆工芸技術を学んでい

る学生1名（女性、23歳、経験年数2年6ヶ月）、漆工芸に従事している非熟練職人2名（A：男性、34歳、経験年数6年6ヶ月、B：女性、31歳、経験年数9年6ヶ月）、漆工芸に従事している熟練職人1名（男性、57歳、経験年数39年）の4名とした。

図1 見立て

2. 2 見立て時の条件

図1に、見立て時の画像を示す。見立ては様々な環境下で行われるが、本研究では作業環境を蛍光灯で十分に明るく照らした室内とし、机の上に見立ての対象である漆工芸作品「蒔絵角皿」（江戸時代）を用意した。見立ての際には、特に注目する点は指定せず、作品から読み取れる情報について、逐一言葉で表現するように指示をした。また見立てを行いやすいように、作品を持つことも許可したが、傷を付けないようにするため、手袋の着用を義務付けた。見立てにかかる時間は、作品の情報を十分に読み取れる程度を想定し、最長でも30分を目安とするように指示をした。

2. 3 テキストマイニング

被験者ごとに得られた見立て時の発言をテキス

トデータとし、IBM SPSS Text Analytics for Surveys（IBM社製）を用いて分析を行った。「蒔絵」「塗り」といったカテゴリを設定し、言葉の関連性の検討を行った。

3. 結果

図2に、見立てに要した時間を示す。経験年数が長くなるにつれ、時間も長くなる傾向にあった。

図2 見立てに要した時間

テキストマイニングの結果、被験者は皆、蒔絵についての発言が多い傾向が認められた。そこで「蒔絵」というカテゴリに注目し、カテゴリごとの関連性を検討した。図3と図4に、非熟練職人Bと熟練職人の結果を示す。ここで●はカテゴリを示し、そのカテゴリに該当する発言が多いほど大きくなる。直線はカテゴリの重複度合いを示し、太いほど重複度が高い。経験年数が長いほど、他の多くのカテゴリと重複が見られ関連を持っていることが示された。非熟練職人Bでは、蒔絵/蒔絵粉カテゴリが8、蒔絵/工程カテゴリが7あり、蒔絵/蒔絵粉カテゴリと蒔絵/工程カテゴリでは重複が4であった。熟練職人では、蒔絵/蒔絵粉カテゴリが19、蒔絵/工程カテゴリが14、図柄カテゴリが9あり、蒔絵/蒔絵粉カテゴリと蒔絵/工程カテゴリで8、蒔絵/蒔絵粉カテゴリと図柄カテゴリで8の重複が認められた。

図3 非熟練職人Bの言葉の関連性

図4 熟練職人の言葉の関連性

4. 考察とまとめ

見立てにおいては、経験年数が長くなるに従い、見立てに要する時間が増すことが示唆されたが、これは熟練度が増し、それだけ多くの特徴や情報を対象作品より見出すことができているものと考えられる。テキストマイニングの結果から、熟練度が増すに従い、「蒔絵」というカテゴリに対して様々なカテゴリとの関連が示された。特に蒔絵粉と工程には密接な関連が認められ、“蒔絵粉の種類により工程が決まる”という熟練職人の認識と一致していることが指摘できる。また熟練職人は蒔絵粉と図柄との関連も高く、意匠に合わせた蒔絵粉の使い方も考慮していることがわかる。これらのことから、熟練度が高いほど複数の情報を得ることができ、またそれらを組み合わせることで特徴の認識を確かにしているものと推測される。

こうして多くの特徴を見出し、さらに組み合わせることによってさらなる特徴につなげることができるのが熟練職人であり、言葉で表現すれば結果的に見立てに長い時間を要することになったものと考えられる。

複数の情報を捉えることが、作品の本質に迫るのに必要であることが示唆されたが、たとえば漆文化財の修理・修復の際に熟練職人がいなければ、技法や素材の解明は科学的分析に頼らざるを得ない。そういった場合、ひとつの特徴だけではなく、複合的に特徴の分析を進めることで、熟練の漆職人が行う見立てに近い分析を行うことができ、修理・修復の適切な方法の選択につながるものと考えられる。

謝辞

本研究において使用させて頂いた“蒔絵角盟”については、風俗博物館（京都市下京区）にご協力いただきました。心より感謝の意を表します。